

は膝や足に効験があると聞いていたが、**業作国(岡山県)**まで行くことはできない。

次に語は**室町時代**に移る。文龜二(一五〇二)年に**運齋師**宗抵は八十二歳という高齢で旅の空にあり、しかも中風気味であった。弟子の**宗長**が喜寿を経て生國の駿河へ帰るといふの聞いて、一緒に連れて行ってくれと頼んだ。二のことは宗長の『宗抵終壽記』に書かれてゐる。この頃温泉地で邊歌の会が催されることが多かつた。二人は一纏に草堂に着いたが、宗抵は近くの伊香保の湯が中風にいと聞いてそそんで一人で出かけた。

この後二人はまた一纏に駿河を目指し、相模の箱根の蘆の湯本にまで辿り着き、明日は箱根を越えよと励まし合つたが、その夜に宗抵は息を引きとつた。箱根湯本の**早稲寺**には今も宗抵の供養塔があり、また彼の次の宛句を刻んだ句碑が立っている。

世によるはるらに時雨の宿りかな  
戦國時代の北條早雲、武田信玄らの戦國大名は領國を整備し、温泉の保護開発も行ったことはよく知られてゐる。

## 六 江戸時代と温泉

江戸時代は平和が続いて温泉開発が進み、利用者も多くなつた。その後次第に温泉絵図や温泉案内の出版が行まれた。その後次第に温泉絵図や温泉案内の出版が増え、天和年間(一六八〇年代)には熱海の絵図も刊

た元禄二(一六六九)年頃にはこういう風流の旅をする人はまだまだ希だつたようだが、彼らも温泉は利用してゐる。この旅で二人は那須の湯本は見物しただけで、温泉には入らず、福島の飯坂では長宿のような所に泊つて温泉に入つた。『奥の細道』には次のように書かれてゐる。  
其の夜飯坂にとまる。温泉あれば湯に入りて宿を

かるに、土坐に筵を敷きて、あやしき賣家なり、灯もなければ、ぬるり火かげに燈所をまつけて臥す。灯もなければ、ぬるり火かげに燈所をまつけて臥す。さらに奥羽から北陸を経て加賀の山中温泉へ着いた時には立派な宿屋に泊り、**巨摩**はすつかりこの温泉が気に入つたらしく、次のような文章を残して絶賛してゐる。

北海の磯つたひして、加州やまなかの濱湯に浴す。里人の曰く、このところは扶桑三の名湯の其の一なりと。まことに浴する事しはばなれば、皮肉うるほひ、筋骨に通りて、心神ゆるく、偏に顔色をとどむる心地す。かの橋原も舟をうしなひ、慈暈が菊の袴折もしらす。やまなかや菊はたぞらじ湯の匂ひ 巨摩

ているので、その一部分を次に引用する。  
温泉は諸州に多し、入浴して宜しき症あり。悪しき症あり。良くもなく悪くもなき症あり。凡そこの三症あり。よく選んで浴すべし。湯治してよき病症は外症なり。打身の症、蒼馬したる病、高き所より落ちて痛める症、疥癬など皮膚の病、金創はれ物の久しく癒えがたき症、おとそ外傷には神効あり。又、中風、筋引つり、じま(縮まり)、手足しびれ、萎るたる症によし、内症(内蔵疾患)には相応せず。

江戸時代のこの頃から**豊之医学**の中で**吾医方**という学派が興つて来て、その中の**後藤良山**、**香川修徳**の入門温泉を特別に重視した。中でも彼等は**但馬城崎の新湯**(今の一の湯)が最も癖のない名湯であると推奨した。修徳は「一本堂薬選」続編に相応頁を割いて温泉のことを書いたために城崎温泉の評価は上つたらしい。その後、**雁屋**の**原双桂**は彼等の説を反駁し、九州太宰府の近くの**武蔵温泉**(現在の二日市温泉)が最もであると主張した。しかしこれはいわゆる、水掛け論であつて、とちからかに量配をあげることはできない。

江戸時代も後期になると物語などが湯治の目的で旅行する人が増加した為、文化七(一八一〇)年に江戸の本屋から「旅行用心集」という便利なマニュアルも出版された。これには温泉についての説明もかなり詳しく、その一部分を次に引用する。

湯の効能不案内の場所は、其の土地の人に能く問合せて湯治すべし。病症によつて合ふと合はざるもあはじめ一日一日の中は、一日に三、四度に限りべし。相応する上は、五、七度迄はくるしからず。若人又は虚弱の人は斟酌あるべし。又多年の病は、一回(一週間)二回にては癒えざるものあり。故に三回、四回、又は一、二月も入るべし。

これより少し後のこと、**文政十(一八二七)**年に水戸藩士の小宮山**楓軒**は持病の**疝氣(胆石?)**が悪化し、藩医の治療でも良くならず、藩医は奥州玉造(鳴子)温泉で三週(三週間)治療するがよかつと診断書を書いてくれたので、それを離れ提出し、従僕をつれて出発した。  
楓軒は勉強家だつたようで、あらかじめ修徳の『薬選』を読んでいた。まず鳴子温泉郷の入口の川邊に着き、彼の旅日記によると、

行李を出して衣服を改め、先づ温泉に一浴し試むること一に薬選の律に従ふ。暑清く熱くして長く入浴する能はず、槽辺の板上にありて坂なかけ肩背にそとに、その快きこと云ふべからず。衆人衆浴する者幾處同浴す。  
二には当時大きな宿屋が二軒あつたが、自然割の湯治場で、農閑期には浴客が千人にもなるという。また紙数もないので、この湯治の願末は残念ながら省略する。

## 七 明治・大正時代と温泉

明治時代の温泉に關係ある小説で最も評判になつた

のは尾崎紅葉の「金色夜叉」と徳富蘆花の「不如帰」である。「金色夜叉」と熱海の関係はあまりにも有名であるが、この小説にはまた塩原温泉の場面もある。熱海と塩原として紅葉は恩人というべきだろうか。徳富蘆花と伊香保もまた特別の関係がある。蘆花は明治三十一年から翌年にかけて悲恋小説「不如帰」を新聞に連載し、同三十三年にはこれが単行本となり、ベストセラーになった。これが成功した秘密はモデルがあつたことと親子や伊香保といった保養地を背景としたためであろう。小説の冒頭に次のような伊香保の場面が描かれている。

土州伊香保千明の三階の障子開きて、夕景色をながむる婦人。年は十八九。早よき鬘を結いて、草色の紐つけし小紋縷の被布を着たり。

千明とは伊香保の古い旅籠である。蘆花は東京に住んでしたが、たびたび伊香保を訪れ昭和二年に心不全と腎不全で危篤に陥つてから、自身の強い希望で医師、看護婦、妻につき添われて伊香保へ行き、伊香保で死を迎えた。伊香保には今も蘆花の記念館がある。

次に夏目漱石も温泉と関係が深い文豪である。「坊ちゃん」は明治三十九年に書かれたが、これは彼が明治二十八年に旧制松山中学の教師となつた時の見聞をもとにし、近くにあつた道後温泉も名前を貸して出てくる。立派な総湯の振鷺閣(現存)ができたばかりの頃であつた。次のようである。

温泉は三階の新築で、上等な浴衣をかして流しなつて入饌で済む。其上に女が天目へ茶を載せて出す。おれはいつでも上等へ入つた。湯蓋は花崗石を置かみ上げて、十五畳敷位の広さに仕切つてある。大抵は十二四人漬つているが誰も居ないことがある。

次に「草枕」も明治三十九年に発表されたが、これは明治二十九年に熊本旧制第五高等学校に奉職した時の経験をもちにし、熊本に近い小天温泉が那古井の湯という名前が出てくる。二つの一軒宿で「草枕」の

主人公である画家が場に入つている時に、宿の出入りの娘が同じ浴衣に入つて来る所があるが、彼はこれも「非人情」の世界のもつと見るのである。

浮きながら考ふる間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらわれた。みなきり渡る湯煙の、やわらかな光線を一分子ごとく含んで、薄紅の暖かに見える奥に、濡むす黒髪を雲とながして、あつらへ限りの背だけ、すらりとも伸した女の姿を見た時は……

語は突り、漱石は明治四十三年に胃潰瘍の療養のため伊豆の修善寺へ行つたが、二で大量吐血をして人事不省に陥る危機に瀕した。それが何とか回復した後の俳句二つを示す。

別るや夢一筋の天の川  
秋風や唐紅の咽喉仏

彼の大正五年の未完の作品「明暗」には彼が好きな湯河原も出てくるが、省略する。

最後に田山花袋を取り上げる。花袋は文学史上では自然主義の作家といわれているが、非常に多くの紀行文を書き、大正七年には「温泉めぐり」という単行本を出した。これからまず伊豆湯ヶ島の所を引取る。

天城の手前における湯ヶ島の温泉も私に忘れられぬ印象を与えた。その旅舎はだしが落合様と言つたが、なおこの他に、下流の折れ曲つた向うにもう一の湯ヶ島湯館とも言われる浴舎があるが、その落合様の楼上の間は、影の濃淡の具合が複雑について、旅客に静かな旅の心を味わせた。

次に蔵王岳をめぐる温泉の一部分。

それにつけても思い起すのは、羽前の高嶺(魔王)温泉から、案内者を一人伴れて、蔵王岳と地蔵岳との間を掠めて、一日がかりでこの青楳温泉に下りて来た時のことであつた。それは夏の八月の末であつたが、登路は頗る峭しく、行つても山は尽きず……まことに日本の美しい山河とともに日本の温泉も尽きることはないだろうが、この温泉文化を大切にした

### 八 現代日本人と温泉

大正から昭和に移り、温泉開発はより組織的になつたといえる。既に大正九年に鉄道院は「温泉案内」を刊行して、温泉を観光的に開発利用することを企図したが、鉄道省となり昭和に入つてから「温泉案内」は何度も版を改めて多くの人を温泉に誘つた。

しかし温泉開発はひとつ間違えば副開発の危険性もある。大正の末年に熱海の間欠泉が自噴を止めてしまつたことはこれを象徴している。この頃から温泉の掘削が増加し、自噴泉が減少して来たのである。

昭和四年には官民の交連、観光、温泉の開発者によつて日本温泉協会が設立され、健全な温泉地の育成に力を注いだ。これは今は民間団体となつて存続している。昭和二十三年に制定された「温泉法」は温泉の適正な利用を意図したものであるが、それ以後も温泉の掘削は逐年増加し、昭和三十年代以後の経済高度成長期になると、大資本が温泉に投下されることになり、また掘削技術も進歩して、千以上の大深度掘削も可能となつた。

深く掘れば掘るほど地熱は高くなるから、今まで温泉がなかつた所にも新しい温泉地が誕生するようになつた。「古里創生資金」がこの傾向に拍車をかけたが、温泉さえ出れば地域おこしになるというものではなく、もつと健全な温泉開発が望まれる。

国土の資源は有限であり、温泉を含めてそれは国民共有の財産の筈である。現在、日本の温泉は環境庁が管理しているが、同庁が指定している国民保養温泉地ののぞくなる整備と活用を期待したい。